

とある血涙の奇形変種(フリーク)

iと θ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ほかの人とは違う『ばけもの』の力を持って生まれてしまった坂崎いつか。

彼の苦悩と甘酸っぱいストーリーをどうぞお楽しみください。ヒロインは絹旗さんです。

今年は高校受験があるため更新は不定期になります。超御了承ください。

あと、東京喰種から、赫子とRc細胞の設定を引っ張って来る予定です。

といっても、赫子が使えて再生能力がある人。なので普通の武器でも傷つきません。

目次

プロローグ	1
1話 ばけものの日常	5
2話 桜の咲く季節	8
3話 手紙	15
4話 決意	18
5話 進め	21
6話 絹旗さん	25
7話 I	33
8話 哀	37
9話 愛	41

プロローグ

いつからか、嫌な文章が頭の中にずっと浮かび上がるようになった。

「世界と繋がりたいのならば、自分の手でそれを実現させなさい」

疲れきってベッドに横になった瞬間、コップに水を汲むその瞬間。本当にふとした時にその文章は浮かび上がってきて、俺自身の声がそれを読み上げていく。

「世界と繋がりたいのなら、嘘を吐くのはもうやめにして、ありのままを受け入れてくれる人を捜しなさい」

うるさい。暗闇の中ほかの誰でもない自分の声に向かって言う。そんな人はいない。いるはずない。

「世界と繋がりたいくないのなら、もう人と触れ合うのはもうやめにして、傷つけない世界に行きなさい」

そうしたい。そうできるように努力してきた。でも。

「ずっと君はここにいていい」
でも。それでも俺は。

「人の心の中に——」

世界と繋がりたい。人と繋がりたい。

「——ばけものの居場所なんてないんだよ」
それが分かっていても、尚。

今から遡ること4年。中学でいつもつるんでいたメンツ、5人でバ抜きをした。53枚が人数分に分けられ、それが手札として手元に配られ時からゲーム終了までずっとジョーカーはそこで笑っていた。

裏から見ればすべて同じように見える53枚も、すかしてみたら異質なものが混ざっている。バ抜きにおけるジョーカーは異才とか、奇才とか、そういうみんなから羨ましがられる異質ではなく嫌われる

ほうのいわば異物、異型。

カード同士がまとまりを作り、場に出される。ジョーカーは組みを作れず、手札に残り、腐っていく。醜さゆえにババ抜きというひとつの社会から切り落とされる。どんなに努力しようとジョーカーは、ほかの52枚にはなれない。

ついに最後の一人になってもカードの中のピエロは笑い続ける。

俺は、道化師。ジョーカーのようにみんなの中に紛れ込んで、みんなを騙してる。

そして恨む。なぜ、ほかのカードのように生まれてこれなかったのか。

俺は手に残った一枚を、みんなに提示するために床に置いた。

過去に一度だけ。この力を、呪われてる力を他人の為に使ってみたことがある。

路地裏で、絡まれている女の子を助けてあげた。

小説とか映画とかじゃあもう使い古され、今じゃ逆に見かけなくなった展開。助けてあげた女の子とのつきあいが始まるとか、そういう展開なんてあるわけ無いと言葉では否定し、でも心の奥底じゃあ僅かに期待していた。俺の手を引っ張ってこの底なし沼から引きずり出して欲しいって。

でもそんな淡い希望はすぐさま砕け散った。

その力を使って自分と同年かもう少し上の男たちを痛めつけた。その場に4人がのびる。その間その女の子は口を半開きにして、座り込んでいた。男たちが全員倒れ、それが終わり、俺は助けたその子に目を向けた。

目があう。その途端、何かにはじかれたように立ち上がり奇声を発しながら、俺から逃げていく。奇声の中にはつきりと、その単語が聞こえた。ばけもの。

ばけもの。俺は立ち尽くしてその言葉を頭の中で反芻する。少年

たちとやりあった時に割れ、足元に飛び散ったガラスに目をやる。ガラスの中から真っ赤な、彼岸花のような毒々しい色の眼が覗いていた。その生物の背中からは禍々しいこれもまた肩から赤い羽根と腰から触手が四本生えている。余りにも醜い、ばけもの。

俺はそのガラスを踏みつけた。何度も何度も何度も。ガラスを粉々にしてもその沸き上がってくるその感情が沸き上がってくる。怒りでも、悲しみでも、絶望でも、諦めでもあって、そのどれでもない感情が溢れ出す。

壁を思いつき殴りつけた。壁には拳と同じサイズの穴が空き、手の甲には傷ができる。その傷をしばらく見つめていとすうっと消えていく。それを見たら、気が狂いそうだった。

なんで。頭を壁に思いつき打ち付ける。激痛が体を走り抜ける。でもそれは長くは続かず、傷が治っていく気持ち悪い感覚がその代わりに走る。

なんで。少年たちが俺を傷つけるために取り出したナイフを拾い上げ、自分の腹に突き立てる。お腹から血が出て、痛いというよりは熱いという感覚だった。嬉しかった。人と同じで俺は痛みを感じることができる。ゆっくりとそれを抜く。するとすぐさま傷口が塞がった。

なんで。奇声をあげ、目を見開き、腹を刺す。何度繰り返してもナイフを抜いた途端塞がっていく傷口。何度もなんどもなんども何度も、傷ついては治っていく。

なんで死ねないの。少年たちのリーダーだった男の胸ポケットが不思議な膨らみ方をしていた。まさぐってみると冷たく硬い感触。取り出され、切れかかった蛍光灯に照らされ黒く光る拳銃は、予想よりずしりとしていた。安全装置を外そうと、必死になつてガチャガチャといじくる。拳銃を持つのはこれが初めてだった。使い方なんてわかんない。それでも自分を撃つために試行錯誤を繰り返す。

その時、手元で爆音がした。はじけ飛ぶ鉄片。体中を襲う痛み。熱い。

長い悲鳴を、上げた。それは、体を襲った痛みからではない。自分がまだ死ねないこと、自分がばけものだということ、を再び確信させられたその苦しみによるもの。声を上げていないと狂ってしまう。

いや。俺は既に生まれた時から、ずっと。

1話 ばけものの日常

本を読み、ハラハラし、感動し、涙する。この本を書いた人と、つながっていられる。人と同じような感情を抱くことができる。本を読んでいるその間は自分がばけものだということを忘れられた。

気が付けば、俺の部屋には本が所狭しと並べられていた。本棚には入りきらず、床にまで積み上げてあるような膨大な量は、近くの古本屋で購入し、やがては売られていくのだった。バイトとかで入ってきたお金は半分以上が本に消え、食費、光熱費はどうかやりくりできている状況だ。

そんな中、俺は一人の小説家に出会った。彼女の名はM・T。最初に彼女の本を読み終わったとき、体のそこから何か、言葉では到底言い表せないようなものがこみ上げてくるのを感じた。あえて言葉で表すなら、登場人物の境遇が俺に似ていたこと、そして救われたこと。その二つが重なって、もしかしたら彼女だったら救ってくれるかも知れないという期待と、もし拒絶されたらという恐怖心が混ざって溢れ出したような気持ち。

結果として、自分から彼女に会いに行くとかそういう行動は起こせなかった。でも俺は彼女の本を心の支えとして生きていくことになった。本棚の一番取り出しやすいところにM・T作品を並べる。同じ名前が本棚に並ぶとコレクションのようでなんとなく達成感を感じる。やりきれなくなったときはその本にすがりつき、希望を見出す。そんな毎日を送っていた。

中学の頃はコーヒーを飲みながら読書って何かいいな、と思っていたのだが、ページをめくる方に熱中してしまいコーヒーは一、二口飲んだだけで気が付けば冷め切っているということが何回も発生したため今はやってない。カツコつけてブラックのんだら、あまりの苦さに中身を捨てるという事例もやめてしまった要因の一つだ。

飯は、コンビニでパンとかおにぎりとか。安かったら弁当とかを食い続けてきた。不健康極まりないのは百も承知だ。だから飯を作ろうと思いついたし(その日の夜にはコンビニに走っていった)、いつか

は手作りの料理とか食べさせてもらいたいなあ、とか思う。

人とは深い関わりを持ってないけどそれでも友人関係はそれなりに築いていると自負しているし、今の生活にはそこそこ満足している。そのせいで、普通の人になりたいとますます渴望するのだが。

つい先日のことだ。M・Tの代表作が映画化された。普通の人に見えるように、青春をエンジョイしているように見えるようにしたいのもあって、俺は映画館に足を運んだ。悲しいかな友達は捕まらなかった。補修とか、いろいろあるようだ。

映画は子供の頃―7歳ぐらいの時に一度くらいは見たことがあった。その記憶はとてもしよぼいもので、ああなんとなく見た気がするという程度のもの。

真つ暗な劇場の中、スクリーンが俺に見せた景色は美しかった。

まず映ったのは空。ただひたすら青い背景、そこにある真つ白な雲。だんだんとカメラは下を映していく。そこに現れたのは小道。桜の並木道。どこかの屋上から撮影した風景だろう。風が吹き、葉が揺れる。一本の桜の木の下で見上げているのは背の高い少女。繊細な顔立ちで、人形みたいな彼女はこの物語の主人公で、この場面は本でいうプロローグに当てはまる。

ただ、それだけのシーン。15秒あまりのそのカットだけで、俺の心を震えさせるのには十分だった。

上映が終わっても、しばらくの間俺は席を立つことができなかった。あの本の世界がスクリーンの中で何倍にも美しく描かれていたから。それをゆっくり噛み締める時間が欲しかった。

映画っていいな。素直にそう思った。7歳の時はまだきつと感性が豊かじゃなかったんだろうなと思う。でも、今は。

それから俺は週に一度か二度、映画館に足を運ぶようになった。古本をM・T作品以外すべて売り、お金を作ったのだ。

行く前からどれを見ようとかは決めずに映画館に行ったため、時間带的にあまり面白いものがやっていないこともよくあった。でもそんな作品でも、これを作った人たちがどんな想いでこの映画に携わってきたか。素直に思いの丈をぶつけるつもりで挑んだのか、金が入れ

ばいいという気持ちで撮ってきたのか。それを考えるとどんなB級映画でも、そこそこ楽しめることを俺は学んだ。

尤も、その下に行く、C級とやらはまだ見たことがないし、見る気も起きないと思っていたのだが。

2話 桜の咲く季節

映画にはまってから数ヶ月。よく晴れた春の日のことである。

俺は今日、比較的ラフな格好で家を出た。日差しが暖かく、心地よい風まで吹いている。こんなすがすがしい日は外に出る限りだと思っただ。

映画館に着くと、今の時間帯に上映される映画はすべて既に見た作品だった。同じ作品を二度楽しむのも悪くはない。伏線がどう貼ってあったかとかそういうのを楽しむことだっただけでできるが今俺はそういう気分ではなく、仕方ないからしばらく待つて別の映画を見ることにした。

ポップコーンを買ってから、持ってきた本を取り出し、椅子に腰掛け読み始める。Y・Aの作品だ。M・Tは彼の大ファンで少なからず影響を受けたのだ。そんな彼の作品にはシヨツキングなものが多く、いちいちハラハラさせられたり、そのグロテスクな描写に顔をしかめることも多々ある。が、一度読むと病みつきになる作風だった。

半分ほど読み終えたところで顔を上げると俺にとって未視聴の映画が10分後に上映されるようだった。急いで立ち上がるとチケットを買いに店員のいるカウンターに足を運ぶ。

そしていざ座席を選ぼうとしたその時、財布からお金を取り出そうとしていたその手をはたと止めた。まさかの全席空席。よつぼどのB級映画だろう。流石に二時間ぐらいを棒に振るのは気が引ける。今からでも別の映画を見ることにしようと思つて店員に切り出そうとする。すると隣の列から「幻の池！チケット一枚超ください！超急いで見ようかどうか悩んでいるその映画である。思えばタイトルからクソだ。池ってなんだ池って。

声のした方を見ると、中学生くらいの女の子が手にポップコーンを抱えながら係員さんを待っていた。お世辞抜きで結構可愛い。その子のワクワクした顔がなんとも可愛いのだ。すごく楽しそう。

俺は座席を選んだ。

隣にいた子の顔を見て俺は思ったのだ。この子にこんないい顔をさせる映画が果たしてクソなのか。いざとなったら、B級ならB級の楽しみ方がある。

劇場に入ると、既に暗くなり始めていた。例の中学生はちやうど劇場ど真ん中、ベストポジションにもう座っていて、上映が始まるのを今か今かと待っていた。

俺はチケットに書かれた座席を確認し、階段を登っていく。I列は会場の真ん中の横列である。するとど真ん中に陣取った彼女と同じ列なわけで、1、2、3と番号を確認しながら彼女の方へと歩いていく。横の列は29座席あって、彼女はその15番目の席のようだ。従って、俺の買ったI-16のチケットは彼女の隣である。

俺はその事実気づいても平然と歩を進める。そして座る。I-13に。

俺がわざわざ彼女から二つ離れた13に座ったのには二つの理由があった。

一つ目は隣に座ったところでうちのクラスのK氏のようにさりげなくアプローチができるわけでもなく、むしろ「うわ、こいつ私の隣ですか。なんか超嫌だなあ」とか思われてしまいうんじやないかと気が気でないから。

二つ目の理由は俺がいる場所、俺が座るべき席、そして彼女。その三つの位置関係にある。F列は今彼女により1-14の席と16-28の席に分断されている。そして俺は1-14の方にいる。目指すべきは16。つまりだ。この狭い通路の中、俺は彼女の前を通させてもらわなければならない。

さらに追い討ちをかけるように彼女の服装が目についたのだ。なぜそんなにふとももを出しているんだ。万が一アレに触れてしまつたら・・・こうなつたら俺はなすすべがないのである。もちろん、彼女がもし普通か、それ以下の顔立ちだったとしたら迷いなく16番を目指したことだろう。彼女が可愛いからこの判断をした。そして、今この劇場には二人しかいないんだ。少しずれても問題はないだろう。

我ながらどうでもいいことに精一杯頭を使った俺は座席で買って

きた白ぶどうジュースをのむ。俺は炭酸は無理なのだ。そこで安定の白ぶどうジュースである。甘すぎない味が口の中を冷たくする。

二つ右で「あ」と声が漏れる。

「席を超間違えてました」

彼女はそうつぶやくとI-14、要するに俺の隣に移動してきた。

なぜだ。君はあのまま座っていればそれで解決したじゃないか。わざわざ、むさくるしい男子高校生のとなりなんぞに座らないでも良かったじゃないか。しかも劇場内でもしこれが俺じゃなかったら襲われていたかもしれないのだぞ？

「……」

「……」

そして、間が持たない。それをどうにかするためにジュースを飲む。この分だと随分早く飲み終わりそうだな。ポップコーンも、もう……。

「……」

「……」

映画よ、早く始まってくれ。いつもだったらとっくにもうすぐ公開される映画の宣伝とかが入ってくるはずだがC級映画ともなると無くなるようだ。シアターにはジュースを啜る音と、ポップコーンを食べる音が響く。

何か話しかけたほうがいいのだろうか。女の子に気の利いた言葉の一つもかけてあげられない自分が嫌になる。

頭の中で文章を必死で組み立てていると、嬉しいことに向こうから話を振ってくれた。

「こんな超つまらなそうな映画を見に来るなんて、あなた超物好きですわね？」

「え？あー、宣伝さえ入ってこない映画はこれが初めてですよ」

「へーそうなんですか」

「はい、そうです……」

何が「はいそうです」だチクショウ。せつかく話題振ってくれたの

に続かないだろうが。俺は必死に頭の中の語彙を総動員して会話を続けられるよう頑張ってみる。5withで聞けばいいんだ。さらに思考を進めたどり着く。『How about you?』これだ。

「あなたは、よく見るんですか？B級映画」

「そうですね。超ヒットしてる映画よりやらかしちやつたの方を超多く見ますね」

クソつまらない映画ばかりを好んで見る人が居ると言うのは小耳に挟んでいたが、彼女もまたその一人だったわけか。

「へえー、どうしてですか？」

「そうですね、私が好きなのは大ヒットを目標に超頑張って作ったのにB級になった映画なんですけどね」

そうやって、俺が頑張って会話を続けているとやっと映画が始まった。

開始してからすぐに、これはB級でさえなく、C級だなということが見えてきた。

FBIとか、そういう職業は映画では定番であろう。宇宙パルサーってなんですか。カッコ良さげな単語二つ並べてみましたー的な意味不明な造語である。大迫力のスクリーンの中で、「貴様が宇宙パルサーか？」「そうだ私が宇宙パルサーだ」とかいうやり取りがなされている。制作時誰か止めなかったのかな？というほどに「だあー超つまらないです」そう、超つまらない。

って、それを言うなよ。いま必死でこれの楽しみ方を模索していたのに。

「あなた、超すごいですね。こんなのを真面目に見てるなんて」「いや、全然そんなことないよ？あまりの酷さに呆れてたよ？」

つまらないという単語を聞いたとたん映画がより一層色褪せて見えてきた。こういう時、言葉の力というものを感じる。

ポップコーンの箱に入れると指が箱の底を叩いた。もうなく

なったのか。ジュースももう半分以下である。俺は少し考えてから話しかけた。

「あのー、この映画って何時間かわかります?」

「2時間45分です。ちなみに上映されてから今やっと三十分くらいです」

あと2時間15分。135分。ポップコーンはもうない。ジュースも半分以下。これはまずい。

ということでは俺は眠ることにする。

何分が経過しただろうか。

「起きてください、朝起きてください。超急展開ですよ」

なに?俺は目をこすって、スクリーンを見つめる。宇宙パルサーが敵の基地に突っ込んで行くところである。

「いや別に急展開ではないと思うんだけど」

「超冗談ですよ」

「は?」

「劇場で寝るやつは超外道なので、起こさしてもらいました」

「え、ありがとうございます」

余計なお世話な気もするのになぜありがとうございますと言ったのだろうか。咄嗟に出て言葉なのでしょうがない気もするが、もう少しあったら、気の利いたいい言葉が。

うとうとしては起こされ、うとうとしては起こされ、本人はトイレに立ったりと理不尽さを感じないでもなかった。トイレならいいのかな。

飲み物もとつくに底をついて残されている暇つぶしといえは会話くらいのものだ。といっても俺からはあまり会話を振らず、彼女が話し手で俺が聞き手になっている。

「タイトルの『池』って超惹かれませんでした?」

「いや、むしろそれ見てコレ見んのやめようかと悩んだけど」

「そうですね。名前からして危なっかしいので超面白そうだと思いますが」

「俺にはわからないよ」

時間が進むにつれ会話するのにもだいぶ慣れてきた。相変わらず気の利いた言葉は言えないけど少なくとも俺は楽しいし、彼女だって笑ってくれている。

そうしていると2時間というのはいつの間にか過ぎて、上映は終了した。

「俺は変な単語を大真面目に使つてるとこがシユールで笑えたといえ
ば笑えたな」

「どんなところで、ですか？」

「ほら、炎の中から主人公が出てきて、敵のほうに歩いてくるシーン
あつたのわかります？」

「はい、超覚えてます」

「そこで、敵がつぶやくんです。『宇宙・・・パルサー・・・』って。名
前どうにかしろよって思いません？」

彼女が笑ってくれる。

「いや、今笑つたのはあなたの声の演技が・・・超おもしろくて・・・
あはは」

それに釣られて俺の顔もほころんでいく。

受付の所に出ると彼女のケータイから着信音がした。

「はい、絹旗です。はい・・・わかりました、ちょうど映画終わったの
で超直ぐ行きます」

彼女は絹旗という苗字らしい。仕事かなにかの電話だろうか。彼
女は電話を切ると「今日は超ありがとうございました。いま用事が
入つたんでそれでは」と手を振って走って行ってしまった。

家路に着きながら楽しかったなと今日のことを振り返ってみる。
また、映画館にクソ映画を見に行こう。あの子がいたら楽しいし、そ
うでなくても面白いことがあると信じたい。

ああ、もつとおしやれをしてくれば良かった。春物の衣装ケースを
押入れから出すのを面倒くさがらずやっておけばよかった。

子猫が路地に走って行く。何となくそれを追ってみると猫はもう
見えなくなっていた。代わりにいたのはガラの悪い高校生二人組。

踵を返して元の道に戻ろうとする。背中に重い衝撃が走った。俺

は突然のことに対応できず、バランスを崩し地面に倒れ込む。

「兄ちゃん金だしてけよ、せつかく来たんだからさあ。出さないとどうなるか……」

俺はそいつの顔を見た、そいつも俺の顔を見た。そいつは血相を変えて逃げ出す。連れも、急いでそいつのあとを追う。

俺はそこに座り込んだまましばらく動けないでいた。

痛みを感じると、それは出てくる。瞳が真っ赤に染められて、人じゃない証が体に表れる。

深呼吸をしてから、俺は近くにあったガラス窓を覗いた。目は元どおりになっていたので俺はうつむきながら再び歩き出す。

家まで十五分ほど、帰ってくるに珍しいことに投函物があった。

一通の手紙。『坂崎いつかへ』。

3話 手紙

家に入るとすぐに封筒を開けようとする。開けた封筒の中には見慣れない字で文章が書いてあった。

坂崎いつかへ

いまお前がこの手紙を読んでいるとき、私はもう生きてはいないだろう。

なにせ今から13年後だ。私はとつくに力尽きていることだろう。17歳になるといろいろな感情を抱くことが多くなってきただろう？

その中で常にお前の頭の中で蠢いている誰にも相談できない悩みが一つあるだろう。それが一番大きい悩みだと言うことは私もわかっている。

その体のことだ。肩から羽と腰のあたりから生えている触手、痛みを感じると不可抗力で目が赤くなってしまうこと、再生能力。

私はそれをよく知っている。自分が人ではないもののように思えるその感情も。醜い自分とひたすら向き合わなければならない地獄のような日々を。

J・Mという一人の研究者がいる。彼はいわゆるマッドサイエンティストで、数十人の置き去りチャイルドエラーに能力開発の一貫という名目で非人道的な手術を施し続けている。四肢をもうで舌を抜き、這うように移動し言葉もしゃべれないそれを芋虫と名づけ、ばけものと責め苛める。他にも、スケイルフェイス 人を作ってはそれに対して殺さない程度に残酷な行為をし続ける。醜いからお前たちは私にこんなことをされるのだ、と。

私もその一人だ。彼の所有していたRc細胞というのを体に埋め込まれた。背中から意味のわからないものが出てきて、痛みを苦しむ。そんな毎日。

私は失敗作だと、そう言われた。Rc細胞は無限の治癒力を持つ細胞なのになぜうまくいかなかったんだと。

しかしRc細胞を組み込まれた人間は私の他にもいて、その中で唯一私が死ぬことなく手術を終えた。

そんな私の細胞からクローンを作るという計画が既に進行中だとJ・Mいわれたのだ。お前は用済みだと。

5年が経った。私のクローンにはその再生能力が備わっていたらしく、J・Mは満足気だった。

そのクローン、いやもうお前と言ってしまおう。お前には普通の暮らしをさせて、ここに連れ戻したら、その絶望も数倍に増すだろうなとニタニタとヤツは笑っていたよ。

なにせ、致命傷さえ負わせなければ再生する便利なものだからな。お前は。

○

ここで文は終わっていた。俺はどうしても二枚目を読もうとは思えなかった。

俺は想像してしまう。四肢を斬られた人がうねうねと貼って動いているそのさまを。吐き気がこみ上げてきた。

ほかの四人についても同様に頭に思い浮かべる。僵屍はひどく背中が折れ曲がっている・・・任意的にそうさせられた。きっとその体制のせいでひどく顔がむくんでいるだろう。

一つ目。単眼症という先天畸形がある。この場合、鼻が欠損している、もしくは非常に不完全な形であるため、生まれてもすぐにしんでしまうと本で読んだことがある。だが、残酷な行為をし続けているのだから生きて存在しているのだろう。超能力とは何の関係もない残酷な施術だ。

三本腕。これも先のひとつめと同じく希に存在する重複肢症の一つである。こういった極端な畸形胎児は先と同様生まれてすぐにしんでしまう。となるとやはりこれも、施術によって。しかも三本目の腕を兄弟からもがなくてはならない。それを思うと気持ちが悪い。

鱗スケイルフエイス人は字から察するに体中が鱗で覆われた人間だろう。身震い

して、自分の手を腕を、首筋を撫でる。

そして俺とそのオリジナル。

俺はそのJ・Mの遊び道具として生まれてきた。

いつか、という名前もヤツがつけたのだろうか。

いつか夢が叶いますように。そういう思いを込めて付けられた名前だと思っていたのに。

イツカ。サカザキ イツカ。

今まで、父と、母とつながっていた証であるその名前が頭の中でカタカナへと変換され、無機質な響きを含み始める。

怖い。真つ黒な水の中からその感情が浮かんでくる。

怖い。もしヤツに捕まったら……。壊れてしまう。

逃げなきや。ここから逃げないと、痛いのは嫌だ。

でも。

憎い。俺をこんな体にした、ヤツが憎い。

憎い。置き去りにはなんの罪もないのに。チャイルドエラー

行かなきや。助けに行かなきや、みんな死んじゃう。

でも。

怖い。

憎い。

怖い。

憎い。

怖い。

俺はどうしたいのだろう。

4話 決意

俺はあれを読んだあと、その部屋の端っこに小さくなつて座り込み、眠るわけでもなくぼーつとしていた。

寒いわけじやないのに体がどうしようもなく震え、自分の方をそつと手で包み込む。

今日、楽しく映画を見てきたなんて信じられない。裏ではあんなに酷いことが。俺が楽しんでいる間も、苦しみに耐える人がいたというのに。

しかしその気持ちの一方、あれだけひどい事実を知らされたというのになにも行動を起こさず、涙でさえ出てこない。

『人は人のためには泣けない』

M・Tの作品の一節が頭の中に浮かぶ。初めてそれを読んだときは果たしてそうだろうか、と思った。よく映画とかで恋人が死んでその事実を泣いて受け止める、というシチュエーションがある。人は人のためには泣けないというのなら、この場面は嘘だということのか。

今俺が泣くとしたら、人のためだろうか、自分のためだろうか。

置き去りの人たちには申し訳ないが、俺は彼（彼女）たちのためには泣けない。俺には名前も知らないような人のために流す涙はない。

実際、赤の他人に対して泣ける人間などいるのだろうか。

俺は思う。赤の他人の不幸を見聞きして泣く、という行為はほかでもない自己陶醉だと。「私は赤の他人の不幸で泣けるほど優しい人間なんですよ」という陶醉、もしくは周りへのアピール。

涙は驚くほど簡単に売り物になる。可愛い人が泣きじやくつていたらそれこそ絵になるし、そうでなくとも周りの人が声をかけてくれる。

俺はそれが嫌で泣かずに生きてきた。自分のためでさえ人前では泣けなかった。

俺はその言葉に自分を当てはめ、自分が人なのではないかと思うことができた。以来その言葉にすがって生きてきた。

あれから何時間が経ったのだろうか。

横になつて寝ていたらしい。

眠っている間に死ねてしまえばいいのに。

だからといって、自殺する勇気なんてものはない。これだけこの体が誰かのコピーだと分かっている、長年寄り添ったこの体が愛おしいのだ。

俺はJ・Mによって作られただけもの。J・Mがいなければ俺が生まれてくることもなかった。

さしずめ悲劇の主人公といったところか。物語ならきつと今すぐにもヤツの居場所を必死になつて探して殴り込みに行くのだろう。床に着いた体を持ち上げるとひどい頭痛がした。

世界が歪んで見える。

無知は罪である。よく耳に格言であるこの言葉を俺は噛み締める。無知が罪なら知つてて何もしないのは？果たして罪だろうか。俺は自問してみる。

自分の力によつて変わってくる、と俺はすぐさま自答する。

ヤツはきつと恐ろしく強大な力を持つてるに違いない。それがなんなのかはまだわからないけど、俺と同じ力を使っている俺のオリジナルを制しているのだから間違いはない。なら、オリジナルと同じくらしいの力を持つ俺が一人でそこに攻め込んだって、捉えられていいように甚振られるだけだ。

怖い。死にたくない。手紙には捕まえに来るという趣旨が含んである。逃げなきや。捕まったらきつと……。

だがここは学園都市。逃げてもどうせ捕まってしまう。殺されてしまう。

逃げてでも逃げなくても殺される。俺は……。

声を上げた。あーあーあーと誰を責めるわけでもなく、ただ声を出す。息が切れて途中で声が途切れてもすぐに再び声を出し始める。

怖い。その思いを消し去るためにただひたすら声を出し続けた。涙が溢れてきた。

立ち上がって壁を蹴る。ドンドンドン……。途中バランスを崩して転びそうになっても続ける。爪先が痛い。

あーあーあー。

気持ちはモヤモヤしたままだったが、いつの日かに、頭の中に浮かび上がってきたその言葉がもう一度蘇ってきた。

「世界と繋がりたいのなら自分の手でそれを実現させなさい」
残されてる道は一つだろう。

俺はもう逃げない。体のせいにして人と深く関わってこなかったその愚かな行為を改めたい。世界と、人と繋がってみせる。

俺は、誰のためでもなく、ただ自分が前に進むためだけに、J・M
を。

殺す。殺してやる。

5話 進め

殺すにしてもJ・Mという手がかりだけではどうもすぐに見つかりそうにはなかった。どこかのデータベースには記されているのだろうか、俺にはそこにアクセスする権利はない。

ならばハツキングしかないだろう。けれど、ここ学園都市でそっち方面に人並みにしか知識を持っていない俺には何ができるだろうか。残りの手がかりは、やはりこの手紙であろう。だが、俺はどうしても二枚目に手をつけることができなかった。

今日は本当にいろんなことがあったせいかな、体の疲労感が半端なく、頭も回らない。

俺はヤツの居場所を考えることを諦めると、大人しくベッドに潜り込んだ。

朝までぐっすり眠っていたようだ。

枕元の目覚まし時計は、仕事をしなかったらしい。午前十時、デジタルでそう表示されていた。学校は八時半までに登校と決まっているので完璧な遅刻である。

急いでベッドから跳ね起き、身支度をしようとしたとき壁に掛けたカレンダーが目に入った。

3月28日。つまりはまだ春休みである。

それを確認すると直ぐにUターンし、ベッドを指す。

途中ふらつとしてしまい、テーブルに手を付く。昨日の手紙が手に触れた。

昨日あったことを思いだし、二度寝している場合ではないと思っておす。すぐさま顔を洗い、服を着替える。

端末を立ち上げ『J・M 科学者』で検索する。しかし、そう簡単には見つからない。一番の近道はやはりあの手紙だが、二枚目を読むのは気が進まない。

思考を巡らした結果、ヤツと対峙したときにヤツに勝つための手法を身に付けるべきだという結論に達した。

この学園都市にも数こそ少なからうが、武芸を教えしてくれるところはあるだろう。検索しようとして文字を入力し、だがそこで手を止める。

もし、その教室で目が赤くなってしまったら？俺みたいな初心者は多少運動能力が高かろうが、思い切り腹にストレートパンチをもらい、畳に勢いよく投げつけられ、固め技を決められるだろう。そうしたら、目の色が変わってしまうのは避けられないだろう。アイマスクをしながら教えてもらおうわけにもいかないだろうし、そういうところに行くのは得策とは言えない。

人から教えてもらったほうが早く上達し、そのレベルもより高いものになるのは分かっていたがこうなれば仕方がない。教本に頼るしかないだろう。

行きつけの古本屋は11時開店であと一時間近くある。

あいにく、眠気は完全に覚めたので二度寝はできない、空腹感を感じていない、春休みの宿題もなかった。何をして時間を潰そうか考えていると、立ち鏡の中の、自分の服装が目に入った。

俺はクロゼットの奥の方から結構重い衣装ケースを運び出す。夏のバーゲンで買ってきて、まだ着たことのない春服が結構出てきた。それらを出して、代わりに冬服を入れていく。もうそろそろ着れなくなってきた服はビニール袋にたたんで入れておく。

ジャケット類をハンガーに掛け、その他のものをタンスにしまい込む。値札がまだ付いているのばかりで、それを見るたびにバーゲンっていいなと思った。

出してきた春服に着替えると、もう店の開店時刻であった。俺はさつき冬服を詰め込んだビニール袋と財布を手にかを出した。

古本屋までは10分程で到着した。この近くには映画館とかデパートとかがあったりするので暇なときには結構この辺をうろついている。行きつけのこの店、BOOK ONは一回はフツーに古本が置いてあるのだが二回には古着を売っている。要するに古着の買取もしてくれるのだ。

俺はまず2Fに行き、古着の査定をしてもらいに行く。その間にス

ポーツの教本コーナーを見に行った。

今までは文庫本を見るためにここに来ていたので教本コーナーに行くのはどこか新鮮な感じがした。

格闘技に関する本は、予想以上にたくさんあった。合気道、柔道、空手、ボクシング……。それぞれがどんな競技なのかさえよくわからない俺は取り敢えず、それら全競技に目を通してみた。そのなかで、総合格闘技というなにか良さげな競技があった。

投げ技、固め技はもちろん、殴る蹴るといった打撃もあるいかにも総合的な格闘技であった。最も喧嘩に近い格闘技らしく、写真付き解説本にはスキンヘッドのイカツイ男が右手を大きく掲げていた。

一番喧嘩に近いということは、一番実戦に近いのだろうか。そんなことを思った俺は総合格闘技の『初めてでもよくわかるシリーズ』をレジに持っていった。代金を支払い終えると査定がちょうど終わったらしい。思ったよりも財布が膨れたので満足だ。

今日から家で一人格闘技。春休みが終わる頃にはかなり戦えるようになっていたものだ。「ありがとうございますー」という店員の声を背中に向け、店を出る。

こう、タイミングが良すぎると運命というものを信じてみたくなる。店のドアのすぐ前を、昨日会った絹旗さんがちょうど通ろうとしていたところだった。目が合う。鼓動が早くなる。

「あれ、また会いましたね」
「超偶然ですね」

春服を出してきて良かった。昨日のはラフなスタイルで、決してセクシーのないわけじゃないということが分かってもらえたらと思う。「今日もまた、映画ですか？」

彼女の服装はというと、やはり太ももを大きく曝け出し、いかにも誘ってます、と言っているようなものだ。今の俺の顔は赤くなっていないだろうか。口元が変ににやけていないだろうか。それが非常に気になる。

彼女は頷くと、「悪霊の盆踊りっていう、超C級映画を見に行くところですよ」と答えた。話を聞くと一日一回しか上映していないほどの人

気のなきで、昨日の分の上映は終了していたらしい。

「もう行かないと上映に超間に合わないの。それでは」

彼女は軽く頭を下げると、再び歩き出した。

その遠ざかっていく背中を見ていたら、なんだか悲しかった、痛かった。

俺はこの痛みを知っている。知識として知っている。いつもそれは自分の周りや、小説、映画、漫画などの創作物の中で頻繁に起こっているもので、自分には一生わからないだろうなと思っていたもの。わかつてはいけないなと思っていたもの。

今まで読んできた幾多の本の中で、彼らは自分が行動を起こせなかったことでその痛みを数倍にも膨れさせていた。

ここでやることをやらなければ俺は彼らと一緒にになってしまう。それだけは避けたい。でも同時に俺は人間じゃない。彼らと同じにそれをして、焦がれる権利はあるのだろうか。

だけど、この痛みを我慢しろというのか？ 忘れるというのか？ そんなことはもう無理だ、だから。

「すみません！」

彼女に声をかける。心拍数が瞬く間に上がっていくのが分かる。顔が熱い。彼女が振り返った。

「俺、坂崎いつかって言います。よかったら、映画、ご一緒させてもらえませんか？」

心臓がいよいよ爆発しそうだ。言っちゃったぞという達成感と、断られたらどうしようと言う不安とでぐっっちゃぐっちゃんになって本当に心が痛い。

彼女が口を開くまでの、そのやけに長い数秒間を待つ。

彼女は何も言わなかった。

ただ、少し恥ずかしそうに笑い、頷いた。

6話 絹旗さん

「じゃあ、坂崎さんにならって私も超自己紹介です」と自己紹介を始める。絹旗最愛と言うのが彼女のフルネーム。漢字で書くと『モアイ』とも読めてしまうので、そう呼ばれると超イラツとくるという。

横に並んで歩くと、絹旗さんの歩幅が小さいことが分かった。こうしていると周りからは恋人のように見えるのではないだろうか。追いつけないように少し速度を落とす。

「そういうえば、何を買ってたんですか？」

絹旗さんが俺の持っているビニール袋を指している。格闘技をはじめてみようと思うんだなんて何となく言いたくない。「絹旗さんが見ても面白くないものだよ」と適当にはぐらかしておく。これがまずかったらしい。

「えー、超気になります。見せてくださいよ」

絹旗さんがビニール袋に手を出す。突然のことだったので袋はあっけなく俺の手を離れた。

「格闘技・・・ですか。超似合いませんね」

「えーと、ほら。俺って体細いじゃん？だから鍛えようかなーなんて」
彼女がちらつと俺のほうを見て、それから言った。

「坂崎さんのそのホツソリとした体型の方がムキムキよりも好きですけどね」

外見では平静を保ちながらも心の中はその『好き』という単語が反響してとてつもないことになっていた。そうかな、という一言を口にするのが精一杯だ。

「そうですね。結構スタイルいいじゃないですか。筋トレとかして無駄にムキムキになったら超もつたいないですよ」

「えー、そんなことと思うよ。絹旗さんだつてスタイルいいと思いますよ」

行ってしまったから後悔する。今の発言、セクハラっぽくないだろうか。そもそもどこからセクハラなのか、その境界線すらわからない。しかも、もし彼女がそのことでコンプレックスを抱えていた

ら・・・。

「それ本当にそう思ってるんですか？」

やってしまった。もうだめだ。俺みたいな口下手が映画と一緒にせてもらえませんか、なんて言うんじゃないかな。俺はせめて、小さく頷く。

彼女は俺より3メートルくらい離れた信号のところに駆けていった。そして、後ろで手を組んでくるりと回る。俺のほうを向いて笑いかける。

「お世辞でも超嬉しいです。早く行きましょう？」

俺も彼女のもとへ駆けていき、一緒に並んで信号を待つ。そんな、周りから見たらごく普通の一コマ一コマが俺にとっての非日常で、本当に、本当に・・・。

映画館に着いて、二人でチケットを買う。やはり、座席は一つも埋まっていなかった。ど真ん中のベストポジションに並んで座る。

まだ劇場は暗くなっておらず、俺は絹旗さんがくれたパンフを見る。いかにもやらかしてる感じがする。

「どうです？超危なかつしくて気になりませんか？」

「そうだね。見てられないかも」

そうやって、二人で笑い合い、二人別々の味を買ったポップコーンをつまみ合う。口に塩とキャラメルの混ざり合った味が広がる。

やがて上映開始を告げるブザーが鳴り響き、恐ろしくつまらないその映画が始まる。

「超つまらないですね」

「超つままないな」

開始五分でこの有様である。一人だったらとてもじゃないけど2時間近くここで座っていられる自信がない。

「絹旗さん」

「は？」

「寝ていい？」

「超ダメです。トイレはOKです」

なんて会話をしながらすごす。映画では感染したらその場で死ぬまで盆踊りをし続けるというウイルスを作り出した研究者がそれをばらまいたせいでそれが流行りだした。

チラッと彼女の横顔を見る。つまらなそうだけど、確かに楽しんで、いる。そんな顔はやっぱ可愛かった。

しかしなんだ、このもやもやした感じ。その気持ちに自分でも驚いているけど確かに気づいて認めている。なのに、行動の一つさえ起こせないもどかしさというか、なんというか。はつきりとしなない自分に腹が立つ。

雰囲気だけで言えばこれ以上のものはないだろう。暗い劇場の中で二人つきりで並んで座っている。

それをモノに出来るかは俺の問題だ。彼女の膝に乗せられた小さな手を見つめる。きつと柔らかいその手をどんな風につかめばいいんだろう。きつと暖かいその手をどんなふうに取り込めばいいんだろう。なにもわからない。

彼女は、どの学校に通っているのだろうか。彼女は彼女の友達とどんな風な会話をしているんだろう。誕生日はいつなんだろう。好きな食べ物は何だろう。毎日、想い続けている人はいるのだろうか。

「超辛いですよね」

急に声をかけられて我に返る。

「ん？なにが？」

「死ぬまで、踊ってなきゃいけないんですよ。自分の意思でなく、他人の超自分勝手のせいで」

そう考えると、感慨深いものだ。他人の興味本位に自分の人生そのものを捧げなくてはいけない。自ずと自分に重なる。自分に重なるという部分だけ隠して率直な感想を言葉にする。

「でしょう？これは比較的あたりですね。こういう映画に限って、メジャーな映画より超メッセージ性があったりするんですよ」

これだからやめられないんです。彼女はそう付け足して微笑んだ。

映画の上映が終了し、映画館を立ち去る。それでは、と手を振り返ろうとする彼女に声をかけ引き止める。

「もしよかったら、お昼一緒にしませんか？おごりますけど」

彼女は驚いていたようだが「奢らないでいいですよ。割り勘で」と乗ってくれた。

俺はこうやって異性と二人で食事に行くということとは初めてである。とはいえ、近くのファミレスに入ったただけなので雰囲気がこののと全然くないのだ。

「絹旗さん、ドリンクバーは付けますか？」

「私はそれと、チーズinハンバーグで」

「あれ、意外と食べるんですね」

すると、「別にいいじゃないですか」と頬を膨らませる。

「坂崎さんはどうするんですか？」

「俺もドリンクバーと、ミートソーススパ。じゃあ店員呼んで」

注文が終わり、ドリンクバーに行く事にする。

「普段ここに来るときはドリンクバー往復係がいるんですよ」

「何それ、可哀想だな」

冴えない変態野郎です、と彼女は続ける。

野郎という男と男ってわけか。そりゃあそうだよ、絹旗さんみたいな人の周りに男のひとりやふたり。居ない方が不思議だ。彼はきつと、いや、ほとんど絶対俺より彼女のことを知っているのだろう。顔も名前もわからないそいつに苛立ちを覚える。

俺はりんごジュースをコップに汲むと何を飲もうか迷っている絹旗さんを待たずに席に戻る。

俺はふと、違和感を感じた。フロアの店員たちが彼女の方をじっと見ているのだ。その目はビクビクしている物もあれば明らかに敵意(?)を向けているものもある。戻ってきた彼女にもしかしたらと、俺は声をかけた。

「この店で何かやらかしたの？」

「?いえ、心当たりは超ありませんが。どうしてですか」

彼女は小首をかしげながら取ってきたメロンソーダをストローで飲む。

「この店の店員がみんな絹旗さんのほうを見てたから。ちよつとね」

「あー、なるほど。普段一緒に来てるメンバーが超やらかしてますね。その一味だから目つけられてんのもかもしれません」

このファミレスの常連だったようだ。という事は住んでる部屋が近くに有るのだろうか。気になるがそれを聞いてしまうと踏み出しすぎた。

いい話題が思いつかない。必死になって頭をフル回転させるが気を引けそうなのは全く出てこなかった。焦りばかりが募る。

「坂崎さん」

突然話しかけられたので驚いてしまい、返事をするその声はどこか裏返っていた。

「今まで見てきた中で、超好きな映画って何ですか？」

俺は即答する。

「明るい絶望と前向きな諦め」

彼女はしばらく考え込むと「あー、なんとなく聞いたことあるような無いような・・・」と曖昧な回答をよこした。

「えっとね、原作が小説なんですよ。その小説家さんのファンで、映画やるって言ったから12、3年ぶりぐらいに映画館に。絹旗さんは？」

私はですねー、と長々とその映画について語り始める。本当に映画が好きだっということがその話ぶり、表情からよくわかった。きらきらと星みたいに輝いている笑顔——なんてクサイ表現をつかう日が来るとは思わなかった。だけど、そんな言葉でさえ到底表しきれないほど、魅力的な人だと改めて気付く。

「あと、この映画の戦闘シーンが超酷くて・・・って、聞いてますか？」

「ん?いやごめん。まったく」

「えー!どっからですか？」

「最初に話してくれた映画のタイトルから」

ほとんど超全部じゃないですか！そう言つてむすつとする彼女もいいな、つて思いながら楽しく会話をしていく。ふと思うのだが、俺からはあまり話を振つてない。少し、情けない気分になる。

料理が届くのは、俺のミートスパのほうが先だった。チーズハンバーグが来るまで待つていようとしている俺に「先いいですよ」と絹旗さんは言つてくれた。冷めないうちに、有難く頂くとしよう。フォークを右手に、左手にスプーンを持って食べるのが俺のスタイルなのだ。今日も例外でなく、フォークに巻いたパスタをスプーンに乗せる。

「スパゲッティにスプーン使う人超初めて見ました。本場っぽいです」

ちょうどパスタを口に入れたところだったので、飲み込んでから話し始める。

「本場じゃないんだよね。スパゲッティって本場イタリアからアメリカに移つてきて、その後日本に伝わってきたんだけどさ。そのアメリカの時にスプーンを使つて、それが日本に来たつてわけ」

こつちのほうが食べやすいから、というか音が発ちにくいしソースが周りに飛び散らないとか、マナー的な面でこつちのほうが良いと思つたからこれで食べるようにしている。

「お。あのハンバーグですかね」

彼女の視線の先には白い湯気を立てるハンバーグがあった。店員がそれを運んでくるのをじつと見ている。

お待たせしましたー、と店員さんはチーズハンバーグをコトリとテーブルに置く。絹旗さんは既にナイフとフォークを両手に準備していた。彼女はそれらを器用に使い、一口サイズに切つていく。中からトロつとしたチーズが垂れてきた。いただきますを言つてから、美味しそうに一口目を頬張る。彼女の体型からは想像がつかなかったがよく食べる方なのかもしれない。

いい匂いが店の空調の関係でこちら側に流れてきた。それが鼻腔を刺激し食欲をわかせる。ハンバーグを見つめる俺の視線に気付い

たのか、彼女が「超食べたそうですね。一口食べますか？」と一番小さい一切れにフォークを突き刺し俺の目の前をちらつかせる。それを受け取ろうと手を伸ばす。するとその動きを無視して彼女はそのフォークを俺の口元に近づけた。

「口あけてください」

聞き違いか？『口を開けてください』ってことは恋人同士がよくある『はい、あくん』ってやつをやってくれちゃおうとしているわけか？ゴクリとつばを飲む。なにか俺が勘違いしているのではないだろうか。・・・いやこの状況。口元にハンバーグをさしだしてきているのだ。こつから連想されることは、あくんしかない。勘違いはありえない、と思う。

心拍数が上がっていく。俺はゆっくりと、口を開けた。

その途端、ハンバーグは目の前から消えた。彼女が自分の方に引き戻し彼女の口の中に放り込んだのだ。

「・・・え？」

モグモグとよく噛んでからハンバーグを飲み込んで、彼女は「もしかして『あくん』を期待しちゃいました？」と、笑った。

「口元に食べ物持ってこられたら、それとしか考えないだろ？フツー」
「いや、ちよつとからかってみようかと」

瞬時に顔が熱くなる。耳が赤くなるのを感じた。めっちゃ恥ずかしい。からかわれてただけかよ。『あくん』なんて期待、するんじゃないかった。その期待していた分がそのまま恥ずかしさに変わる。

「耳、超真っ赤ですよ。大丈夫ですか？」

「だいじよばないよ！てゆーか、絹旗さんのせいですよ？」

「顔も赤くなってきましたね。超暑そうです」

そう、過こしややすい温度のはずの今日がこんなにも暑くなる日になるとは夢にも思わなかった。

「で、そんなにあくんして欲しかったんですか？」

「い、いや、そんなわけないし」

「ここではいそうです。なんて言ったら、好感度がた落ちだろうな。でも口開けましたよね」

「そ、それは――」

俺の言葉はそこで止められた。絹旗さんが突如、口の中にハンバーグを突っ込んできたのだ。

「今日のお礼です。超美味しいでしょ？」

笑う彼女に聞かれて、俺は頷く。

頷いてはみたが、絹旗さんのその行動に驚き、そのせいで味はよくわからなかった。

7話 I

家に帰り、決して柔らかいとは言えないベッドに仰向けに寝転がった。だんだん薄暗くなってきた部屋の中で明かりも付けず、スマホを弄る。

絹旗さんからのメール。今日は超楽しかったです。また、見に行きましよう。絵文字やら何やらでデコレーションされたメールが来るとばかり思っていたのだが、その文面はいたってシンプルなものだった。

どう返信したのか。文章を5分ほど考えてやっと返信する。今日の別れ際、メアドを交換した。自然な流れでそうだったので、言いだしたのはどっちかというのは曖昧なものだ。だが、彼女との距離が近づいたことに変わりはない。

突然のバイブレーションに驚き、スマホを取り落とす。返信が早いのはやはり女子だからなのであろう。届いたメールを開ける。見たい映画が来週あたりに公開予定なのでその時また連絡します。

また来週会える、それも彼女から誘ってもらえる。口元がニヤついているのを感じて真面目な顔を作り直す。このままいけば彼女と…なんてことを考えてしまう自分を我ながら気持ち悪いと思う。

そんな浮ついた気持ちをぬぐい去るためにシャワーを浴びに行く。超冷たいわけでもない水を頭から浴びる。全身にひんやりとした間隔が広がっていく。すごく心地いい。それが疲れを少しずつ癒していく。両目をギュツとつぶって、手で頬を強く叩く。

今俺がやらなくちゃいけないことは、ヤツを殺すこと。さっきまでしていた、ふわふわしたものはやらない、やってはいけない。彼女と俺では住む場所が、違う。

その日から俺は買ってきた教本を読んでは真似して過ごした。こんな短時間で筋力が大幅に上がるということない。気のせいだと思うがそれでも少しは肉付きが良くなったのではないだろうか。それは技術面でも同じでこうすれば技がかかるんだなということぐらい

は掴めてきた。はつきり言って、教本だけでこれより上達するのは無理があると思った。さて、そういつた理由もあるのだがやはりこういうものをやり始めてしまうと誰かで試したくなってしまうのが男の宿命というものではないだろうか。

そして俺は今、第十学区の廃ビルを根城にしていたスキルアウト数人と、その地下の駐車場にて対峙していた。

蛍光灯が切れかかった薄暗い空間で、俺は拳を構える。

前の俺ならこんな行動は取らなかつただろう。自分の自己満足のために人を殺すと決意する前ならこんなことは。俺から殴り合いのケンカを仕掛けるだけで、たとえ相手がスキルアウトだとしても殺すつもりはない。とはいえ人を傷つけるこんな行動は。

万が一、ばけもののあの触手や羽根、眼が出てきてしまったら。その人相などがネット上を駆け巡つたら。それを考えるとさすがに怖かつたので、ピエロのマスクをどこから買ってきて素顔を隠している。

オレに向かって疾走してくる先方の二人。下つ端であることにはすぐに気づいた。だって、弱すぎる。殴りかかってきたそいつの拳を潜り、鳩尾を殴りつける。腹を押さえて座り込むそいつを助けようともうひとりの下つ端が向かつてくる。俺はそちらの方を向きそいつと組み合うと足を引つ掛け、勢いよく前へ押し倒した。地下駐車場の中に背中がコンクリートに叩きつけられた大きい音が響きわたる。

それを見たリーダーらしき男が部下に指示を出して俺を取り囲ませた。

俺はそいつらには目も呉れず、この集団の中で一番強いであろうリーダーに向かって飛びかかる。

初撃はよけられ、脇腹に蹴りを喰らう。俺は3メートルほど後退して体勢を立て直す。目が赤くなっている気がするが、この明度とお面のおかげで誤魔化し切れるだろう。それにしてもやはりリーダーだけあって敵は強い。今度はそいつが追撃のために向かつてきた。繰り出された蹴りをうまく避け、カウンターを狙いに行く。相手の攻撃は入るのに俺の攻撃が入らないのがこんなにイライラするものだ。

は知らなかった。これでは分が悪い、どうしたものか。そんなことを考えていたその瞬間。顎にアッパーを食らってしまった。その場に崩れ落ち、俺を殴ったそいつを見上げる。ニヤニヤと意地悪く笑う醜い顔。手には、拳銃が握られていた。悪寒と恐怖が体を走る。

殺される。もう終わったはずなのに。心の中で叫ぶ。今度こそ殺されてしまう！

必死の思いで立ち上がり、拳をこいつの腹を殴りつけるために動かす。突然の立ち上がったので対処できなかったのだろう。みぞおちに拳が突き刺さる。こいつは痛そうな声をもらしたが、攻撃の手を緩めない。緩めたら殺される。前のめりになったそいつの頭を押さえ、顔に膝を入れる。グチャ、と肉の潰れる音とそれから少し遅れて血が床に水音をたてる。こいつは立ってられなくなったのだろう、自身の血の上に倒れ込む。俺は躊躇なくそいつの顔を踏みつけた。思いつきり何度も何度も。殺される前に殺してしまえ。

凄まじい出血量だった。俺の靴を赤く染める。

肩で息をしながら、こいつの顔だった部分を見つめる。俺の足元で倒れているこいつは生きているのだろうか。生きていないわけがない。誰だこんなことをやったのは。俺はこんなにひどいことをするつもりで今日ここに来たわけじゃない。でも、なんだこれは。おそらく彼のものであろう名を叫ぶ声と、オレに向かって放たれた怒声が駐車場の中に響き渡り、脳を震わせる。殺して、ないはずだ。生きてるはずだ。だとしたら俺は人殺しなんかじゃない。そうだ。

そうだよ。なんでコイツは俺の足元で倒れてるんだ？なんでそのまま動かないんだ？なんで俺は、ここにいるんだ？

俺が殺したから、俺が殺したから、俺が殺しに来たから。全部、元凶は俺。悪いのは全部俺。

頭を押さえて、膝から崩れ落ちる。体の震えが止まらない。俺は、それでも俺は悪くないんだ。悪いのは全部この力なんだ。そうだ、この力さえなければ。この力のせいにすれば俺は悪くなくなる。

背中から羽根が、触手が生えてくるのを感じる。

でもそれだけで、俺は何もしていないということになるのだろうか

か。今日のことを見ていた奴が居なくなれば、俺は何もやってないってことにならないだろうか。

2本の触手をうねらせながら、ゆっくりと立ち上がる。周りを見渡すと、すぐに一人のスキルアウトと目があった。触手を操り、その体をぶち抜く。

発砲音が周囲から聞こえ、体に衝撃を感じた。放射されているその羽根を音が聞こえた方向に向かって飛ばす。うめき声と、そいつらが倒れた音が耳を刺激する。

なんだ。人間なんて、この力の前には屈服するしかないのか。J。Mもきつと近くにいた俺の力が怖くなって俺を手放したに違いない。自分で操れないものを、それも意思を持つものを作るなんて、相当愚かな行動だな。

その日、俺は堕ちた。

夜。ベランダに出て、曇った空を見上げる。雨がポタポタと降り始め、少し肌寒い。その空に僕はつぶやいた。

「もうすぐですよJ。M。僕といつかでもうすぐ、あなたを殺しに行きますよ」

8話 哀

俺は硬いベッドの上で夢から覚めた。いつもの見慣れた天井、家具の配置。いつの間に家に帰ってきたのだろうか。

ゆっくりと体を起こす。頭が割れるように痛い。口にはなぜか鉄の味が広がっていた。鉛のように重い足を引き摺るように歩いてキッチンへ向かう。コップになみなみと水を注ぎ、うがいをする。吐き出したその水は透明そのもので、血の色の面影すらどこにもなかった。下で口内を舐めまわす。確かに血の味はするのにな。

ちよつと疲れてるのかもしれない。だから口の中がこんな味なのだ。俺はその疲れを取るためにシャワーを浴びに壁に手をつき、どうにかバランスをとりながら浴室へと向かった。

浴室のドアを開けると、その床を赤みがかかった水が濡らしていた。生ぬるい鉄の匂いをした温風が顔をくすぐる。足が震える。浴槽に張った水の中にピエロのマスクが浮かんでいた。

昨日の記憶が帰ってくる。じめつとした地下駐車場、銃声、叫び声。俺は、われを忘れて暴走した。あの場所にいた全員を殺してしまった。殺してしまった。ただ、俺がどのくらい人と戦えるのか試すという私利私欲のために。自分は悪くないと思いつつ材料として。

自分のやったことに吐き気がした。今回ばかりは怪物の力のせいに行かない。全部俺のせい。吐き気を抑えきれなくなり、浴室に吐く。出てくるんは唾液や、胃液ばかりでその酸っぱさに涙もにじみ出てくる。

人殺し、大量殺人者。これじゃあ、本当に化け物みたいじゃないか。いままで、そういう頭に行かれた犯罪者を軽蔑していた。同時に、自分に言い聞かせた。どんなに俺がバケモノの体でもせめて心は人であらうと。なのに自分がそれに、気狂いになってしまふとは夢にも思わなかった。きつと、俺はこれから自我を保ってられなくなって、本当に狂って、心もなくなってしまうんだ。俺は、その場に座り込んで自分が狂うそのときを待った。

だが一向に狂っていく気配はない。鏡を見ると歪んだ醜い、哀れな

人間が、俺がいた。俺はまだ、殺人鬼になってそれでもまだ、人間であるのだ。その事実には少しだけ勇気づけられる。瞬きをして、もう一度その顔を見る。その表情はもう怯え、悲しんでいるそれではなかった。確かにこれは俺の顔だが、何かが決定的に違う。これは誰だ？

その鏡の中の人は俺に笑いかけた。彼の口が動く。

『大丈夫。悪いのは君じゃない。全部J・Mのせいだよ』

鏡の中に自分じゃないだれかが俺の声でそう言った。鏡の中に自分と似た人が入り込んでいる現象。そんなことはありえない、幻だ。分かっている俺がその鏡に触れようとする自分の体を止めることはなかった。間近で鏡を覗くと、そこには自分の顔があった。もう歪んではおらず、哀れなものであることに変わりはないが、醜くはなかった。

幻に大丈夫だと言われただけで立ち直ってしまう俺を異常だと思える。だが立ち直れた事実には変わりはないのでその異常さを責める気にもなれなかった。俺は立ち上がって、シャワーから水を出し、浴室の掃除を始めた。

・
・
・
・

掃除が終わり、ソファアームに座ってテレビをつけると、例の地下駐車場での惨劇がすでにニュースとなっていた。その駐車場自体に監視カメラはなかったのだが、現場の近くの監視カメラに一瞬だけ映っていた。ピエロマスクをつけた男が現場から走り去っていく映像がニュースで何度も繰り返し再生される。おおごとになってしまったが、ここであるのピエロマスクが活きてきた。

お腹がすいたので、冷凍のフライをレンジでチンする。タッパーに入れて保管してあった白米も温め遅めの朝ごはんとした。フライには塩味が付いていたはずだが、別のまた変な味がした。古くなっていたのだらうと、そのぐらいにしか考えなかったが。フライは結局食べる気もせず、捨ててしまった。ご飯も同じで、食べれなくはないがいつもとは明らかに違う味だった。ご飯は昨日炊いたものなので古く

はないし、お腹もすいていたので我慢して全部食べた。

疲れた。その一言に限る。お腹がいっぱいになってそれなりに疲れているのだ。これはもう眠らないという選択肢はないだろう。俺はゆっくり瞼を閉じ、意識を手放そうとした。

その時だった。床に落ちていた携帯がメールを受信したことを告げる。俺は手を伸ばしてそれを手に取り、差出人の名前を見た。

絹旗さんから。それを確認したとたん、眠気も疲れも吹き飛んだ。ベッドからは寝起き、内容を確認する。

こんにちは。絹旗です。この前超見たいと思っていた映画を明日見に行く予定なのですが、空いていますか？

もちろん空いている。これと違ってやらなくちゃならない用事はない。やったほうがいい事はあるかもしれないのだが。

さて、メールが届いた瞬間に返すべきなのか、それとも少し経ってから返すべきなのか。

今返せば、返信が早くて喜ばれるかもしれないが、ずっと絹旗さんからのメールを待ってた風に思われるかもしれない。

少したってから返せば、返信が遅くて予定とか立てるのに支障をきたしたり彼女の気分を害したりするかもしれないが、『今返した場合に発生する可能性のある問題』を解消することができる。

どうしたものか。一瞬だけ考えて少しは積極的な姿勢に診てもらったほうがいいのではないかという結論に達した。明日でいいという旨を伝える文を送り、返信を待つ。

十分たつても二十分たつても、彼女からの返信は来なかった。これは・・・？積極的が裏目に回ったのか？いや、積極的と言えるほど積極的な内容でもなかったが。悪い方に悪い方に考えてしまい、不安になる。こんなことなら、メールに気づいてないふりして後で返せばよかったな。

そんな後悔をしはじめたその時に手の中のスマホが震える。しばらく操作して、スマホを机の上に置く。

明日の10時に映画館に直接集合。さつきまで、嫌われてしまったんじゃないかと不安になっていた自分が馬鹿らしかった。絹旗さん

の事を考えると、やたら不安になるけど一緒にいると誰と一緒にいるときよりも楽しい。俺はこんなことで、本当に絹旗さんのことが好きになってしまったということを思い知った。

9話 愛

俺は待ち合わせ場所の映画館でもうかれこれ1時間ほど彼女を待っている。けっして、彼女が来るのが遅いのではなく、俺がここに来るのが早すぎたのだ。ちなみに俺が到着した時にはまだ準備中だった。待ち合わせの10時が迫り、時計を見る頻度が上がる。といつてもあと十分ほどあるが。スマホで自分の髪型を確認し少し直す。

ここ最近ワックスなんてつけていなかったで、セットの腕が鈍っていた。

「坂崎さーん!」

振り返ると絹旗さんがこつちに手を振りながら走ってくる所だった。手に持っていたスマホをポケットにしまい込み、俺からも手を振り返した。

「遅れてすみません。待ちましたか?」

「いや、遅れてないし、俺も今来たところだから」

ウソつけ、1時間まっただろ。だがそれを言ったら好感度下がりそうな気がする。デキる男はそれをあえて言って距離をグツと縮めるらしいが、そんな高等技術を俺は使えるはずもない。

「で、今日は何見るんだっけ?」

その質問、待ってました!と言わんばかりに目をキラキラ輝かせて、語り始めた。

「今回はC級の中でもさらに超ひどそうな、ゴー、ストロボエッジをチョイスしてみました」

パンフを見せてもらおうといったって普通そうな恋愛映画のようだった。絹旗さんが『ゴー、ストロボエッジ』と途中で区切っていたそのタイトルは空白などで全く区切られていなくて読みにくかった。これもあってC級なのかなと思う。

チケットを買いに行くとな案の定俺ら二人の他に客はいなかった。前と同じように真ん中に陣取る。上映まで少しあったので売店を見て回った。有名な映画のキャラクターのキーホルダーとかクリア

ファイルとか、あとお菓子とかが売っていた。二人で並んで歩いてそれらを見る。すると隣にいる彼女はやっぱり小柄だなど改めて思った。

「あのさ、絹旗さんて何歳なんですか？」

女性に歳を聞いてしまった。失礼なのかもしれない、てか失礼だよこれ。あれ？聞いちやダメな乗って体重だっけ・・・？

彼女が俺を見上げて、目が合う。この角度、めちやくちや可愛いんですが。どうしよう。

「知りたいですか？」

うん、と頷いてしまってからとある可能性が頭をよぎる。こんなこと考えたのは初めてだ。もしだ、万が一だ、彼女が年上だったら。そんなことはないとわかってるけど年上だったら嫌だな。初めて知った。俺は年下派だったようだ。

「じゃあ、超現役の中学生だ、とだけ言っておきましょうか」

年下だという事実にはホッと胸をなで下ろす。そして新たな疑問が芽を出す。中学生に恋をしてしまった俺はロリコンなのか？いや年の差3、4歳だし？大丈夫だろう。

「坂崎さんは？」

「俺？16歳。2週間もすれば17歳だよ」

「お誕生日、超もうすぐですね！」

誕生日。今まで祝ってきた誕生日はお母さんから生まれた感動の日だとばかり思っていた。だがそれは多分俺がオリジナルから作られた感動など皆無だったその日のことを指すのだろう。

「じゃあじゃあ、超盛大にお祝いしましょうよ」

「え？」

「だから、お誕生日パーティーですよ。ケーキにロウソク立てるアレですよ。HAPPY BIRTHDAY TO YOUのアレですよ」

しばらく声が出なかった。正直、誕生日を迎えるということに複雑な想いを抱いていた。今まで16年間順調に成長してきました。ありがたうお母さん、と誕生日に意義を見出していたのにそれがなく

なつてしまったから。誕生日という口実でみんなが集まってわいわい騒ぐだけのモノになつてしまうから。それを事情は知らないとは言えこの人は祝ってくれる。騒ぎたいからとか、ケーキ食べたいとかその為に誕生日を祝うのではなくて、純粹に俺におめでとうを伝えてくれる。俺が誕生日を迎えたというそれだけのことを。うぬぼれだつて、半分以上妄想だつて、要するに踊らされてるんだつてわかつてるけど。それでもやっぱり。

「坂崎さん？」

彼女が俺の顔を覗き込む。しばらく黙つたままだつたので心配してくれたのだろうか。

俺は彼女の肩を掴んで今思ったことを一番簡単な言葉で伝えた。

「スゲエ嬉しい！ホントありがとう」

突然肩を掴まれてきよんとしていた彼女も、笑つて「プレゼント何がいいですか？」と楽しそうに聞いてきた。すごく、楽しみだ。

上映が始まるというので3分前ぐらいに劇場に入った。

「どんなストーリーなんでしようね・・・超ドキドキします」

「パンフには何も書いてなかったの？」

それがですね、と絹旗さんはパンフレットを取り出し、タイトルの下のキャッチコピーを指さした。毒々しいピンクで『だれにも、この展開は読めない・・・あなたは耐えられるか？』とあった。

「ご覧のとおり、何もわかりません。ジャンルさえ・・・ね」

パンフレットの写真を見る限りでは恋愛モノだと思われるが油断は大敵・・・らしい。どうか主人公たちには普通の恋をして、何事もなく幸せになつてもらいたいものだ。

そんなこんなで上映が始まつて、俺らはひとつ勘違いをしていたことがある。タイトルについてだ。

GO STROBO EDGEではなくて、GOHOST ROBOT EDGEだったようだ。幽霊とロボのまさかのコラボに驚き、ああだからC級なのかと納得した。幽霊といっても全然怖くない。俺は多分幽霊より、生きてる人間のほうが怖いのだろう。

「これ全然怖くないね」

横の絹旗さんに話しかける。彼女は無反応で、顔を手で覆ってその指の間からスクリーンを見ていた。

ねえねえ、と肩を指でつつくと「ひゃん！」と変な声を出してゆっくり首を回してこつちを向いた。

「ちよ、超驚かさないてくださいいよお・・・」

・・・もしかして怖いのが苦手なのか？それを聞くと彼女は全力で否定した。

「わ、私がおんなの怖いわけないじゃないですか。こんな子供だし・・・」

スクリーンの中から大きな音がして絹旗さんの声を遮る。その瞬間、彼女は俺と腕を組んできた。

「怖いんだな？」

頬を膨らませ「怖くなんてないです」と意地を張る絹旗さんがどうしようもなく可愛い。これは、別にいいよね。そういう雰囲気なんだから。空いている方の手で頭を撫でる。

「ちよ、ちよつと！こども扱いしないでください！」

はいはい、と軽くあしらう。スクリーンは幽霊がたくさん出てきてロボットが大変なことになっていた。

「あの、もうちよつとこつちに寄ってください。超決して怖いわけじゃないですからね！」

こんなにもシートの肘掛が邪魔だと思ったことはない。だが、それ越しだとは言えできるだけぴったりとくつつく。彼女の頭がちようど鼻の下らへんに来てシャンプーのいい匂いがする。いや、シャンプーじゃなくて、なんつーか女の子の匂いがしてなんていうか、その、心拍数やばい。これ、絹旗さんに聞こえてんじゃないのって思うぐらいやばい。この体制であと30分耐久は俺死ねるよ、恥ずかしさで。

映画が終わってシートを立ててもしばらく絹旗さんは俺の腕にくっついたままだった。歩きにくいことを我慢しながら映画館の自動ドアを目指す。ドアが開いたところで丁度絹旗さんの携帯が鳴った。彼女はフリーな方の手で歩きながら電話に出る。一言二言、相手

と交わすと俺のほうを向いて言う。

「迎えが来てみたいなのでここでお別れです」

なるほど、映画館前の道にはワゴン車が止まっていた。運転席には金髪のお兄さんと後部座席には3人の女性が座っていた。その四人が俺と絹旗さんを同時に見る。横に居た絹旗さんの表情が陰ったように見えた。そして一番手前にいた金髪の少女が口を開いた。

「絹旗くそれ彼氏なワケ？」

おどけた調子で絹旗さんに話しかけているが、無理にそうしているのが見て取れた。絹旗さんは腕をはなして「別にそんなんじや・・・」と答えた。

ジャージを着た女の子が、その金髪少女の奥から顔を出した。

「きぬはた。その人はこっち側に連れてきちやダメだよ」

「こっち側？ってどういうことだ。」

「超わかってます。大丈夫ですよ」

うつむきながら答えていた。こんな彼女の声、聞いたことがない。

「わかってねえよ絹旗。その人と、私やあんたじゃ住む・・・」

「超わかってます！それ以上言わないでください！」

姐御肌の女性のその声を遮って絹旗さんは叫んだ。

ワゴン車のドアを乱暴に開けて座る。助手席の男が振り返って絹

旗さんに「いいのか？」と心配そうに声をかけた。

「かまわないです。超早く車出してください！」

でも・・・とためらう運転手も彼女の切羽詰まった声を聞いてやがて車を出した。

彼女はその間、俺を見ることはなかった。

泣いてたことぐらいバレバレだって。なあ、なんで泣いてんだよ。また会えるし、いいじゃないか。

その日の夜。絹旗さんからメールが来た。

『もう連絡取るの終わりにします。今までありがとうございました。超楽しかったです』

涙で、スマホの画面が濡れていく。手がブルブル震えて、スマホを

取り落とした。膝をついて思う。なんで、あれが最後なんだよ。最後まで笑い笑ってくれよ。涙ポロポロ落としてる俺に言えたものでないことはわかってるけど。

なあ、なんでだよ。俺の誕生日、祝ってくれるんじゃないのかよ。ふざけんなよ。あんなに好きだったお前に祝ってもらえるっただけでどんなに嬉しかったか。

お前は俺のこと、どう思ってたんだろう。

拭いても拭いても流れ出てくる涙を止めることなどできない。頬を伝い落ちていく涙がカーペットを濡らしていくのを見つめながら俺はあの小説のあの一節を思い出した。

『人は人のためには泣けない』

ああそうだよ。そのとおりだよ。俺は俺のためにしか泣けねえよ。俺が好きだった絹旗最愛にあんな別れ方させられた俺が可哀想すぎて泣けるよ。俺は今、絹旗さんがいなくなって、心が痛いから自分を慰めるために泣いてるんだよ。結局みんなそうなんだ。居なくなつた人がかわいそうで泣いているんじゃないやなくて、その人がいなくなつたことで傷ついた自分がかわいそうで泣いているんだ。

あの別れ際。絹旗さんが車の中で流した涙と俺が今流しているこの涙が、同じだったら嬉しい。